

饗宴としての文学宇宙 ベックフォードの「『ヴァセック』の挿話集」について

山口・和彦

I

ウィリアム・ベックフォードの代表作『ヴァセック』の結末近くに、知と権力と官能の極限を求めて、魔界の領袖エブリスに魂を売り渡した主人公が、愛姫ヌーロニハールとともに降った地下宮殿の一室で、悲しげに話しこんでいる“四人の王子と一人の王女”に邂逅する場面がある。

「見知らぬ方々！……私どもに共通の罰を受けるまでの時間を過すためにここにいらっしやっただのなら、何故にこの恐ろしい場所においでになるようになったか、身の上話をお聞かせ願えないでしょうか。そのお返しに私どもの身の上もお耳にいれることにいたしましょう。それは世にも珍しい話でございます。悔んでも後の祭ではございますが、罪を源までたどり返すことが、私どものようなこんな惨めな境遇にあるもののせめてもの慰めでございましょうから」

教王とヌーロニハールはこの申し出を承諾して、ヴァセックは涙まじりに、過ぎ去った事どもを残らず語って聞かせた。彼の悲しい物語が終ると、先の若者が自分の身の上を語り出した。順に一人ずつ話が進んで、三人目の王子の身の上話が半ばまで来たとき、突然大きな物音がしてその言葉を遮った。¹（後略）

物語は、こののち最後の審判が下り、ヴァセックをはじめとする一同に永遠の劫罰が課せられるにいたるのであるが、問題は、三人の語り手のみが言及されてその内実が明かされない三つの物語の存在である。これらの物語は、枠構造をもつ『ヴァセック』正篇のいわば入れ子として、ベックフォードが構想していた四つの続篇のうちの三篇——「アラシー王子とフィルーズカー王女の物語」、「バルキアローフ王子の物語」、および「ズルカイス王女とカリーラー王子の物語」——で、正篇の執筆にひきつづいて1783年頃から順次書き進められていたと推定されるが、1786年にサミュエル・ヘンリーが無断で『ヴァセック』を刊行した時点では、四篇目の挿話がいまだ完成していなかった。²

ヘンリーというのは、自身も東方学にかんして相当な学識を有していたベックフォードの友人で、フランス語による『ヴァセック』原典の英語への翻訳を委託されていた人物であるが、このヘンリーが、四つの続篇とともに『ヴァセック』を出版する計画を言明していたベックフォードの意に背いて、著者名をふせ、しかもアラビア語原典からの翻訳というふれこみで、『ヴァセック』正篇の英訳のみを無断で出版してしまったのである。スイス滞在中にヘンリーによるこの背信行為を知ったベックフォードは、自分が原著者であることを明らか

にするため、やむなく当初の計画を変更して、翌年『ヴァセック』のフランス語原版のみをローザンヌとパリで刊行する措置をとったが、ヘンリーの行為によってベックフォードの著者としての榮譽が著しく傷つけられたことは言うまでもない。ベックフォードと信頼関係にあったはずのヘンリーが、なにゆえにこうした背信におよんだのか、その真相は詳らかでない。一説にはヘンリーが経済的困窮に陥っていたからとも、また、この時期たてつけに実生活上の不幸——1784年におきた同性愛スキャンダル、それにとまらぬ社会からの指弾と事実上の国外流謫、念願としていた貴族の爵位獲得の断念、そして逆境のさなかに彼をささえ、また彼の最大の理解者でもあった妻の死、等——にみまわれて創作の筆が滞っていたベックフォードの様子にしびれをきらし、ヘンリーが独断で正篇の英訳のみの刊行に踏み切ったためともいわれているが、いずれも憶測の域を出ない。

ともあれ、原著者の思惑に反して、『ヴァセック』正篇とともに世にでる道を閉ざされた「挿話集」は、その後も、波瀾にとんだ作者自身の人生同様、数奇な運命をたどりつづけた。1790年代から10数年の歳月をかけて、ベックフォードが郷里のフォントヒルで実現した時代錯誤の阿房宮建造と広大な風景庭園の造成が、世間にセンセーショナルな話題を提供するようになると、これら未発表エピソードの存在もまたひとつの伝説となり、パイロンをはじめ少なからぬ人々が披見を願いでるところとなった。³このとき、ベックフォードはこれを固く秘匿して人目にさらすことを拒み通したが、出版の計画そのものを断念してしまっていたわけではなかった。というのも、彼はこれ以降も断続的に「挿話集」の補筆と修正に努め、自身で改訂の作業にあたった英語版『ヴァセック』（1817）の序文のなかで、かねてからの計画を実行にうつす可能性を示唆する一方で、これら挿話を入れ子として内包する完全版『ヴァセック』の出版にむけて、その宣伝文まで用意していたことが知られているからである。⁴

しかし、こうした周到な計画にもかかわらず、結局ベックフォードの存命中にはついに日の目をみることはなかったこの「挿話集」は、いつかその存在そのものが疑問視されるようになり、やがて人々の口の端にもものぼらなくなっていった。ところが、今世紀の初めに、ベックフォードの血縁にあたるハミルトン公爵家に伝わる文書類のなかから、三つのフランス語草稿が発見され、これが問題の未発表エピソードであることが判明したのである。⁵ベックフォードが『ヴァセック』正篇を補完する続篇として構想し、にもかかわらず生涯被匿する結果となった「『ヴァセック』の挿話集」とは、それではどのような物語集であったのだろうか。ここでわたしたちは、これら挿話の物語宇宙のなかに足を踏みいれてみなければならぬ。

II

今日のこざれている三つのエピソードのなかで、第一の挿話として構想されていたのは、ヴァセックに最初に声をかける人物として設定されているアラシー王子の物語である。「一同のうちでも一ばん重立った者」⁶と評されるアラシーが語り手となるこの物語は、ベックフォードが、正篇と同様に主としてバルテルミー・デルプロの『東洋全書』に依拠しつつ創作したもので、史実や人名、地名等にかんしては、おおむねデルプロを踏襲していることが、すでに研究によって明らかになっている。⁷しかし、物語の筋そのものには原典はな

く、魔界墜ちにいたるまでの主人公の運命が、異国の神秘的な雰囲気背景としながら、幻想味ゆたかに描き出されている。

物語の舞台は中央アジアで、ホラズム国の王子アラーシーが主人公である。アラーシーは、父の逝去に伴い20歳で王位につくと、こころならずも政務にいそしむ日々を送っているが、森のなかで孤独な時間を過ごすのを唯一の慰めとしているような夢想癖のある若者である。そんなアラーシーの前に現われるのが、カスピ海西岸に位置するシルヴァーン国の王子フィルーズである。家臣の反乱にあったシルヴァーンの王が、砦を包囲されて危難に陥りかけた際、一粒だねの王子を親交のあったホラズム王の世嗣アラーシーにかくまってもらおうべく逃れさせたのだという。心を許す友人を得ることが容易ではない宮廷生活を送るアラーシーにとって、フィルーズは何よりもまず「無垢の魅力をすべてかねそなえた心の友」⁸と見え、アラーシーはこの若き友を手厚く遇するのだが、かねて許婚の間柄にあるギーラーン国の王女ロンダーバーよりも、むしろこの若き王子の愛を勝ち取ろうとすることによって、アラーシーの運命に大きな変転が生じはじめる。

やがて、ロンダーバー王女との婚礼の期日が近づき、王女がホラズムに到着すると、じつは悪魔に通じる拝火教の祭司の手で育てられた素性をもつフィルーズは、善の体現者である王女の力に圧倒されて危機的状況に直面するが、アラーシーはロンダーバーを妖女呼ばわりするフィルーズに籠絡され、その幻術にも誑かされて、ギーラーン国に進攻して領土を蹂躪したうえ、帰国して身を隠していた王女を住居もろとも焼き払い、復讐の刃をむけてきたギーラーンの国王と王子をも返り討ちにしてしまう。敵軍がなおも追撃してきたとき、アラーシーはフィルーズの魔術によって祭司の洞窟に逃れ、そこでフィルーズが実際には男装したフィルーズカー王女であることを知らされて、二人は恋人同士の契りを結ぶ。その後、祭司の家臣である20人の黒人とともに帰国したアラーシーは、なおも幾多の瀆神行為を繰り返した挙句、もはやマホメットの敵の住処にしか逃げ場がないことを知るにいたり、永遠に別れることのない世界に住めるという希望だけを頼りに、フィルーズカーとともに拝火教の聖地イスタカールの地下に降り、そして魔王エブリスの支配する地下冥府に永遠に閉じ込められることになるのである。

背景となっている東方世界の文物の記述には、作者の該博な東方学の知識と同時に、⁹洗練の追及にかけては他の追随を許さなかったというベックフォードの貴族趣味の一端をも垣間見ることができる。しかし、アラーシーによって語られるこの地獄降りの物語に妖しい光彩を添えているのは、アラーシーが男装したフィルーズカーにたいして寄せる同性愛的感情である。今日わたしたちが目にする物語では、フィルーズカーが男装していた経緯が示されて、表面上は性倒錯が回避される形になっている。しかし男同士の交友として始まり、やがて男女の性愛へと変じる情熱が、ついには主人公を破滅にいたらせるという筋立ては、アラーシーが男装したフィルーズカー王女にたいして抱く同性愛的嗜好が物語の秘められた意匠であることを暗示しているように思われる。

この作品の自伝的側面が強調されるのも、けっして理由のないことではない。ベックフォードの私生活を彩っていた孤独や憂愁、とりわけ性的アンビヴァレンスがこの挿話にはつきまとい、架空の作中人物であるはずのアラーシーにベックフォードの面影が揺曳していることは否定できないし、アラーシーを悪へと誘う美少年として描かれるフィルーズ（フィル

ズカー)にも、同性愛スキャンダルのもう一方の当事者であったウィリアム・コートネイのイメージが重なりあうからである。ローザンヌで刊行されたフランス語原版のタイトルが、そもそも「二人の友人の王子、アラシーとフィルーズの物語」となっていたことを、ここで指摘しておくべきかもしれない。もともとこの挿話は男同士の友情をめぐる物語として構想され、それがのちに、友人の性が転換されて、現在のかたち修正されたとみるのが現在の研究者間の定説となっている。¹⁰ただし、だからこの挿話を、単純に作者の私的告白と解してよいというのではないが。

III

「アラシー王子とフィルーズカー王女の物語」が同性愛のモチーフを暗示させる作品であるとすれば、当初は第二の挿話として位置づけられていた「ズルカイス王女とキャリアー王子の物語」は、双子の兄妹の近親相姦的愛を基調とする物語である。ベックフォードの東方文学への傾倒の端緒となったのが『アラビアン・ナイト』との出会いであったことは夙に知られているが、双子の兄妹の運命をめぐる展開されるこの挿話には、その『アラビアン・ナイト』との顕著な類縁性が認められる。『ヴァセック』の語りの構造において『アラビアン・ナイト』の枠形式を踏襲したベックフォードは、主題の面でも、この綺譚集から少なからぬ啓示を受けていたのかもしれない。この挿話の語り手であるズルカイスによって語られるのは、同書の「第一の遊行僧の話」(第12夜)を連想させる、兄妹の近親相姦的な愛の道行きなのである。¹¹

禁断の知識と絶対的な権力を希求する父アクメッド王の不敬がもとで、異教の悪しき影響下に、過敏すぎる感情と癒しがたい欲望を体内にやどして誕生した双子の兄妹は、幼い頃から教育も遊びもすべてを共にしつつ成長し、いつか二人だけの時を過ごすことを何よりも愛するようになる。唯一の王子にたいして大いなる期待をよせる王は、つねに妹の傍らから離れようとしぬ王子の柔弱ぶりをみかね、13歳になった王子を妹から引き離し、雄々しく育てるための厳しい鍛練を課すが、キャリアーは一晩の自由があたえられと、直ちにズルカイスのもとに馳せ戻り、こう語りかける。「……ね、ズルカイス、私達が愛し合って何が悪い？私達を一緒に産ませた神は同じ趣味を与え、同じ情熱を与えたではないか？……私達が愛し合ったって少しも罪ではない。もし私達が意気地がなくて離ればなれになっていれば、それこそ罪悪だ」¹²

二人のこのやりとりを盗み聞いた王は、先にとった処置の手ぬるさを悔い、さらに徹底した措置として、ズルカイスをナイル河を30日間航行したところにある島の宮殿に住まわせることを決断する。「もしも父がこんな警戒心を起したり、謀略を巡らしたり、呪われた予見を持たなかったならば、私達は無^む辜^こで決してこの恐ろしい地獄の責苦を見ないで済んだことでしょう！」¹³とズルカイスは語っているが、彼女の世話をすることになった“椰子の木登り”という老賢者こそ、魔王エブリスの臣下であった。20人の不幸な人間を新たに地獄の王に仕えさせようとしている老人は、自らの情熱のためにはいかなる良心の呵責にも立ち向かおうとするズルカイスの大胆な性質を利用して、その兄ともども魔王への生贄に供そうと企んでいたのである。

老人のそうした底意を知る由もないズルカイスは、この島で4か月を過し、ある日の朝、

いつになく激しい言葉で兄との別離を嘆いているさなかに、老人から人類よりも優秀な霊魔がいること、そしてその霊魔に助力を請えば、兄との再会が叶えられることを教えられ、どんな危険があっても霊魔の聖殿へ案内してほしいと嘆願する。そして暗闇が訪れたころ、老人に先導されて、恐ろしい迷路のなかを抜け、ようやく巨大な松明に照らされた広間の五つの階段の前に出る。老人は、このうちの一つだけが霊魔の聖殿に通じていると言い残して忽然と姿を消し、ズルカイスはひとり取り残されるが、地獄の王が助けてくれるという、どこからともなく聞こえてくるカーラーの声に励まされて、階段の一つを進み、ついにとある部屋にたどりつく。

ハミルトン家所有の草稿では、物語はここで跡絶え、結末部分の詳細は明らかでない。しかし、語り手である妹が兄とともに地下宮殿の一室に居合わせている正篇の結末から逆算するかぎり、二人がその後どのような経緯を辿ったにせよ、最終的には近親相姦的愛を成就すべく共に魔界に降る運命を選んだことは間違いない。¹⁴ともあれ、断片として今日に伝わるこの物語にも、第一挿話と同様に、多分に作者の内面の構図が反映されていると思われる。アラーシーとフィールズの物語がベックフォードとコートネイとの関係を想起させるように、カーラーとズルカイスという双子の兄妹の物語には、ベックフォードと彼の愛人であったといわれる、従兄弟の妻ルイザとの関係を彷彿させるものがあるからである。しかし、この挿話に関して、個人史の投影で作品を読む必要はない。近親相姦のモチーフは、古来、芸術家の心をとらえつつける怖ろしくも甘美な夢のひとつであり、従兄弟の妻との関係に触発された一面があったにせよ、ベックフォードの精神的主題が文学的伝統の蘇生を通じて、そのまま普遍的な夢の形象にまで昇華したのがこの作品であるとみるべきであろう。

IV

しかし、これら二つの挿話以上に暗黒ロマンスとしての趣きをとどめているのは、本来第三の挿話として構想されていた「バルキアローフ王子の物語」である。分量の面で『ヴァセック』正篇をはるかに凌ぎ、また、それ自身三つの挿話を入れ子として内包するという二重の枠構造を有するこの物語は、人間の奥底に潜む悪を一身に体現しているように見える人物を主人公としている点でも、ひときわわたしたちの注意を繫留する。「わたしの罪の数々は、教王ヴァセックの悪行よりもさらに大きいものでございます」¹⁵と語るバルキアローフは、つねに自分自身の犯罪性を意識しているだけでなく、それを自己の優越性の証しとさえみしている。この意味では、バルキアローフはベックフォードの作中人物のなかで、ほとんど唯一、確信犯罪者の風貌をもっているといえるかもしれない。

カスピ海沿岸のダゲスターンの町に、漁師の三男として生まれたバルキアローフは、幼い頃から外見を取り繕う偽善のすべを身につけ、兄弟のうち最も父の眼鏡にかなったものに譲られるという宝物を手に入れる機会を、虎視眈眈と窺っている。やがて、成人を迎えた三人の息子たちに、父が、生涯の伴侶となる女性を一カ月以内に選ぶよう申し渡したとき、バルキアローフは、一刻も早く父を喜ばせようと、町で偶然出くわした見知らぬ女性を、結婚相手として連れ帰る。のちに「ホマユナーの物語」で語られるように、バルキアローフの伴ったホマユナーという名のこの女性は、試練のために人間界に遣わされていた妖精であり、いわば彼の失われた良心を象徴する存在であるが、バルキアローフは、ポーの描く「天邪

鬼」さながら、ことあるごとに彼女の忠告に逆らいつづける。

バルキアローフの地獄への転落の第一歩は、ダゲスターン王の息女ガザヒーデを誘惑して、二重の婚姻を結ぶことから始まる。言葉巧みに王女に取り入ったバルキアローフは、正体が露見するのを恐れ、一刻も早く王位をわがものにしようと、ある夜、急死と見せかけて王殺害を執行する。翌朝、容疑者として追い詰められ、生命の危機に瀕したところを、ホマユナーの温情で救われると、性懲りもなく改悛を装って、まんまと王位を掌中にすることに成功する。国王殺害の犯人を知り、ショックのあまり気絶して死んだようにぐったりしているガザヒーデを、バルキアローフが凌辱する場面は、死姦症の主題の変奏なのかもしれない。

バルキアローフの悪業は、しかしこれだけにとどまらない。大守の妃や大寺院の導師の妻たちと不義を重ね、神聖なものを次々と蹂躪するばかりか、彼の助力をもとめて訪ねてきた二人の義姉（この間の消息は「バルキアローフの義姉の物語」で語られる）を指嗾して、兄二人に父親殺しを実行させるよう仕向け、そして兄たちが父殺しを実行したとき、今度はその兄二人を官宦長に殺害させる。バルキアローフ自身は、このとき妖精の杖に打たれて錯乱の発作におそわれるが、無意識のうちに兄嫁ふたりを突き殺し、海に投げ込んだあと気絶する。

既成の道德律を愚弄し、利己的な意志の自由のみを肯定しようとするバルキアローフの邪悪な心は、このあと、彼を守護するホマユナーにたいしてまでも逆恨みを抱くにいたるが、そうしたねじ曲がった彼の自由意志が最も劇的な現れ方をするのは、彼がようやく真に悔い改める決意をして眠りにおちたダゲスターン近くの森で、自分とガザヒーデとのあいだに生まれた実の娘ライラーに初めて出会う場面である。彼女は暴君バルキアローフを恨みつつ、森のなかの小さな家で母の亡骸を護っているのだが、その実の娘に正体を偽って近づき埋葬の手伝いを申し出るころには、すでに彼の心から改悛の情は消え失せている。亡き妻の遺骸を見て後悔の念にとらわれるどころか、若き日の母親の倂をとどめる美しい実娘にたいして異常な情欲を覚えるのである——「わが娘、わたし自身の娘をほどなく餌食にしようと心に誓ったのです！」¹⁶ 娘を情欲の生贄にしようとするバルキアローフの計略は、結局ホマユナーの介入で未然に防がれる。ライラーにその後の母親の身の上話（「ライラーの物語」）を語らせたのち、悪魔と結んで、彼女を伴い地下宮殿に降ろうとしたとき、ホマユナーがライラーを救出し、バルキアローフは独り冒瀆の言葉を発しながら、魔界へと墜ちていくのである。

『ヴァセック』正篇の随所に顔をのぞかせていた作者の豊かな諧謔精神は、この挿話では影をひそめ、人間の内面に黒々と渦をまいている情念の劇が全篇を覆っている感がある。他の二つの挿話と比べてみても、この挿話を浸しているのは、一段と濃い暗黒の色調なのである。バルキアローフは本当に神の裁きゆえに破滅するのであろうか。むしろ彼の存在自体が破滅を希求していたともいえるのではないか。バルキアローフが体現しているのは、いわゆる道徳的な自暴自棄ではない。あるいは甘美な破滅の予感に支えられた墮落でさえもない。あえていえば、それは、豪奢と爛熟のはてに、ただれた内面をかかえて生きていかざるをえなくなったときにあらわれる、空白感と自虐とが表裏一体となったようなデカダンスである。バルキアローフは、自身の犯罪性を明確に意識している。にもかかわらず、いやそれゆえにこそ、次々と禁忌を侵犯していくのである。あたかも、有罪性をこそ運命の星として選びと

った人間にとって、無罪性への反逆だけが唯一の自己確認の祭儀であるかのように。「トマス・ド・クインシーやポーの、シャルル・ボードレーンやユイスマンスの悪魔的な交彩を予示している」¹⁷ という正篇を評したボルヘスの言葉は、的確に「パルキアローフ王子の物語」にもあてはまる。

V

『ヴァセック』の挿話集は、このように、アラビアの教王ヴァセックの精神的眷族たちが、現世における有為転変の所業のはてに、悪魔エプリスの支配する地下冥府に転落するまでの運命をえがいた物語集である。そこには、さまざまな欲望に身を委ねた王女や王子たちが、蟻地獄にひきずりこまれる餌食のように、奈落の底に転落していく道行きが、悪の曼陀羅の様相をもって定着されている。『ヴァセック』正篇が、その世界像において勧善懲悪の思想を継承した枠物語である以上、その入れ子である「挿話集」が因果応報の構図を呈示していること自体は、別段異とするには当たらない。オリエンタリズムの隆盛を背景にして、東方物語が流行の形式となり、ジョンソンやアディソンといった教訓趣味の作家までもがこのジャンルに筆を染めていた当時において、道徳や哲学の喧伝のために東方物語の形式を利用した教訓物語は、けっして珍しくはなかったのである。¹⁸

しかし、時代の好尚に投じたこれら啓蒙的東方物語とベックフォードの物語とを比べてみると、両者のあいだには、そのテーマの類似性にもかかわらず、微妙な、しかし根本的な発想の相違が感じられる。あえて奇妙な言い方をするなら、教化善導のモラルの唱道よりも、破滅にむかって突き進んでいく作中人物たちの行動形態のほうに、ベックフォードの関心は惹き寄せられているように見えるのである。近親相姦といい、同性愛といい、死姦的行為といい、これら逸脱的情念のディテールのまがまがしい豊穡さぬきには、「挿話集」のアモルプな物語宇宙は成立しえないかのような印象すらある。

こういう世界は、ゴシック小説的な道具立てや舞台設定——地中深く穿たれた万魔殿、妖魔に操られる作中人物たち、闇の祭儀に通じる呪術遣い、妖精と悪魔、など——に偏執しながら、まさにその偏執を通じて、人間の奥底に潜んでいる暗い情念のうごめきを形象化しようとしている世界とでもいえばよいであろうか。それを可能にしているのは、もちろん作者の知性、おのれの内部に無自覚なものをのこすまいとする苛烈な自己分析欲とでも呼びたくなるような何かであるが、同時にそこには、自己剔剝にも似た被虐的祭儀に身を委ねながら、みずからの存在証明を求めようとしているかのような作者の面影が重なりあう。

この作品にたいする伝記的アプローチが広く行われているのも、おそらくそのあたりの事情と係わりがある。個々の作中人物のモデルの詮索は措くとしても、物語の主題といい、それを覆う雰囲気といい、「挿話集」のなかに作者の青春時代の心象が投影されていることはまず疑いえないし、たび重なる不幸に見舞われて、精神的にも不安定な時期を過ごしていたといわれるベックフォードの強迫心理も、作中に少なからず影を落としているかもしれない。ボイド・アレグザンダーやロバート・J・ジェメットといった代表的な研究者たちが、多かれ少なかれ、この物語集を作者の自伝的作品として位置づける所以である。¹⁹

ただ、そうした伝記的解釈の妥当性を踏まえたうえで、なおもここで確認しておく必要があるのは、芸術家としてのベックフォードと作品との美的距離の問題であろう。「挿話集」

が一個の文学作品であるかぎり、個々の挿話に作者の実生活がどれほど反映されていようと、作中人物は直ちに作者その人ではない。作者と作中人物とのあいだには、つねに超えることのできない懸隔が存在するのであり、作中人物は虚構における可能性の追及であるという意味で、作者の心情を代弁する必要はないのである。むしろ現実的にはタブーであるような地平を切り開くことによって、文学は人間の暗い秘密の領域をも包摂することができるといえる。「挿話集」に自伝的色彩が濃厚であるからといって、この作品をことさら伝記に還元して読む必要はない。ベックフォードは彼の心奥に秘められた衝動を、啓蒙小説的な物語の枠組みのうちに封じこめてしまったのであって、こういう仮構への誠実以外、彼にとってはいかなる誠実も意味をもつことはなかったのである。頽廢的心象に彩られたこの物語集が、その反現実志向にもかかわらず、なおも生々しいリアリティーを保っているのも、逆にいえば、仮構によってしか内心の夢を語りえない地点に、すでに作者が立たされてしまっていたからである。

芸術家の心にひそむ反地上的な渴望を、かりに饗宴への飢渴とよぶなら、それを地上の制約内で具現化するのには、飢渴を相対化するもの、すなわち知性あるいは批評精神である。しかもこの飢渴はとうてい市民社会の価値秩序とは相容れない凶暴さを含んでいる。このとき芸術家は、好むと好まざるとにかかわらず、偽善者的精神像に近づいてしまうものである。市民社会の価値体系と和解しえない渴望の所有者である彼は、社会の常識とつじつまをあわせるために、やむなくおのれの渴望を偽装して表現することを強いられる。ベックフォードが「挿話集」において実現しているのも、こういう知的偽装にもとづいた渴望の様式化にほかならず、そうした文学的詐術を通じて、ベックフォードは真にベックフォードたりえているのである。それは、虚偽をまことしやかに語るのとは違って、真実を真実として語ることを躊躇し、虚偽のうちに真実を封じこめてしまうような精神像に通じているといえればよいであらうか。いずれにせよ、一見啓蒙小説的な物語の様式のうちに、それとは相反する悪の饗宴を噛み合わせ、それを逆説的な幻影として封じこめている点に、ベックフォードのこの物語集の文学作品としての特質がある。

ベックフォードにとって、芸術とは、もともと虚構の領域に属するものであり、作品造型は、たんなる具象的な生活体験の再現ではなかった。それは、心のなかに秘められた夢、あるいは心の奥底で呼び求めている何かの表現であった。生の根源にあるものの極が夢みられたとき、それが「挿話集」の文学宇宙となって現出したとしても奇とするには当たらないのである。爛熟した知性が、想像力の働きを媒介として自己の内なる渴望のゆくえを確認しながら、しかもその饗宴の夢から限りなく覚醒してゆく文学的祭儀、おそらくそれが『ヴァセック』の挿話集の内実である。

註

- 1 ウィリアム・ベックフォード著、小川和夫訳『ヴァセック』(国書刊行会、1980) 103頁。
- 2 第四の挿話は「ムータシムの物語」と題され、1815年頃には完成していたとみられるが、その後、何らかの理由で破棄されたといわれている。William Beckford, *The Episodes of Vathek*, ed. with an Introduction by Robert J. Gemmett (Rutherford: Fairleigh Dickinson University Press, 1975), pp. XXII-XXIV 参照。
- 3 Robert J. Gemmett, *William Beckford* (Boston: Halls, 1977), pp. 107-108.
- 4 この宣伝文のなかで、ベックフォードは彼の物語集のモラルを強調し、それが読者におよぼすであろう「ある健全な効果」について語っている。同上、106-107頁参照。
- 5 同上、108頁。
- 6 ベックフォード著、小川訳『ヴァセック』103頁。
- 7 たとえば、Gemmett, pp. 109-110を参照。
- 8 Beckford, p. 6. なお、訳出にあたっては、ウィリアム・ベックフォード著、私市保彦訳『ヴァテック』下(挿話篇)(国書刊行会、1990)の当該箇所を参照した。
- 9 ベックフォードの東方学の成果については、Gemmett, pp. 79-81他を参照。
- 10 Boyd Alexander, *England's Wealthiest Son: A Study of William Beckford* (London: Centaur Press, 1962), pp. 92-93.
- 11 Gemmett, p. 111.
- 12 ウィリアム・ベックフォード著、柄本魁訳「ズルカイス王女とカリラー王子の物語」(ベックフォード著、柄本訳『十七歳の幻想』雪華社、1984所収)、175頁。
- 13 同上、177頁。
- 14 Gemmett, pp. 116-117.
- 15 Beckford, p. 51.
- 16 Beckford, p. 150.
- 17 ホルヘ・ルイス・ボルヘス著、土岐恒二訳「序文」(ベックフォード著、私市訳『ヴァテック』上(正篇)国書刊行会、1990所収) 12頁。
- 18 当時の東方物語の流行については、エディス・パークヘッド著、富山太佳太他訳『恐怖小説史』(牧神社、1975) 139-140頁や、Martha Pike Conant, *The Oriental Tale in England in the Eighteenth Century* (New York: Octagon Books, 1966), 等を参照。
- 19 Alexander, pp. 91-102, Gemmett, pp. 109-119等を参照。